

普及センターだより 255号

目指せ！ 日本一の カラー産地

== 丸朝園芸農協花卉部 ==



丸朝園芸農協花卉部（代表・西海一男氏・36名）は、平成4年より切り花の生産を始めました。そして現在では、サンダーソニアとリュココリネで、日本一の生産量を誇る産地となりました。

しかしながら、サンダーソニアやリュココリネなどのユリ科植物の連作により、土壌病害の発生が多くなり、輪作品目としてユリ科以外の作付けが、検討されるようになりました。



2年前から試作されていた畑地性カラーはサトイモ科で、ユリ科との輪作に使い、台地の畑地帯で良品生産が可能であることが確認されました。

組織力ってスゴイ

カラーの本格的な栽培は昨年からですが、これまでの間、福島県や長野県の視察、花き市場や種苗会社との情報交換が重ねられました。その結果、栽培や販売に関する条件が整い、32名の栽培者で本格的な栽培がスタートしました。

ニュージーランドやアメリカからの球根を使い、周年生産で、共選共販による全国花き市場への出荷を展開しています。

今、生産現場では、安定生産と低コスト化を図るべく検討が進められています。

数年のうちに「丸朝のカラー」の言葉を、花き市場で聞くことができることでしょう。

え！ 「フスマ」で 土壤病虫害防除？

～ 土壤還元消毒法 ～

田んぼの後は畑にすると野菜が良く育ちます。その理由として、田んぼの土は還元状態（酸素が少ない状態）になっているため、病気の菌が死んだり、いやちの原因になる物質が水で流されてしまうからだと考えられています。

この原理を応用したのが、土壤還元消毒です。地表面の温度も 60 くらいまで上がるため、熱による殺虫・殺菌・殺草の効果が期待できます。

やり方は、10 アール当たり 1 トンのフスマか米糠を土に混和した後、代かき状態になるまで水をためます。その上をビニールで被覆し、後はそのまま 2 ～ 4 週間放置するだけです。2、3 日後にドブ臭がしてくれば、順調にしている証拠です。ビニールをはがせば、すぐに作付け出来ますし、ガス抜きの手もありません。

昨年はトマト、メロン、スイカ、ホウレンソウ、ニラなどで良好な結果が出ています。

水をためた状態にして、ある程度高い温度を保たなければいけないので、使用は夏場の施設に限られます。

でも、従来の土壤消毒に比べコストもかからず、比較的短期間でおこなえ、何より減農薬になる等、魅力的な面も多い方法です。



秋冬にんじん 品種審査会開かれる

秋冬にんじんは7月下旬～8月上旬にかけて播種し、11月～3月に出荷されています。

山武地域の秋冬にんじんは北総台地地帯の芝山町、山武町を中心に生産され、秋冬期の重要な品目となっています。

近年ではコーティング種子の利用による間引き時間の省力化、ハーベスター（収穫機）や自動選別機をはじめとした機械の導入、さらには集選果施設の利用により、作業時間は大幅に短縮され、生産体制に大きな変化が見られています。

このような状況の中、昨年12月20日（木）千葉県野菜品種審査会（にんじんの部）が山武町民会館で開催されました。全20点が出品され審査員による立毛・収穫物審査が行われました。

現在は、ハーベスターの導入により、品質、収量はもとより、収穫時に葉部がしっかりとしている等の機械化に適した優良品種が求められます。

慎重な審査の結果、1位 YC-804（住化農業資材）、2位 FSC-112（フジシード）、3位陽州五寸（タキイ種苗）、4位 NS-5026（野原種苗）、5位 紅あかり（サカタのタネ）となりました。

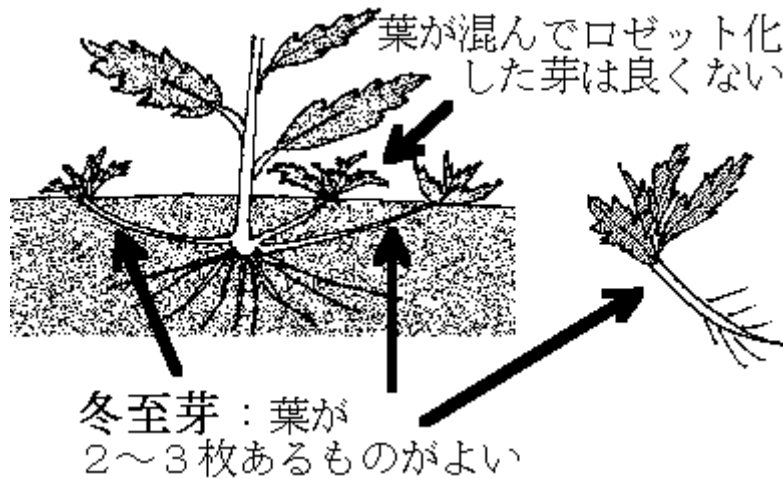


だれでもできる 露地小菊の増やし方

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
7・8月出荷			▲	●	☉	☉	☉	☉	☉	☉	☉	☉
9月出荷					▲	●	☉	☉	☉	☉	☉	☉

▲ 冬至芽植え ● 摘芯 ☉ 土寄せ ☉ 収穫・出荷

当地域の小菊の需要期は、7～8月のお盆と、9月の彼岸が中心になります。生産のスタイルは、大規模な生産から直売所への出荷や自家消費といろいろなケースが考えられます。



どのような生産スタイルでも株の若返り更新は必要となります。そのために、秋に行うかき芽挿し、春に行う冬至芽の植え付けと挿し芽があります。

今回は簡単に増やせる冬至芽の植え付けの方法を図に示しました。

この方法は挿し芽と比べると、親株を多く確保する必要がありますが、確実な発根が約束されます。是非試して下さい。

これで減らせる ジャンボタニシの被害

近年、山武地域でも、海岸地帯から平野部の広範囲の水田や用排水路でジャンボタニシ（スクミリンゴガイ）の発生が目だっています。そして、ここ2～3年は実害も発生しています。



水稻生育時期の対策

水田の土中で冬を越した貝は、水田に水が張られ、水温が18℃に上昇してくると活動を始め、21℃になるとイネや雑草を食害します。春先の気温が高かった昨年、一昨年は、被害の出やすい気象条件だったといえます。

一方、ジャンボタニシは、水面上では、餌を食べられないという習性があります。しかも、田植後3週間もたち、イネが硬くなってくると食べられなくなります。したがって、田植後は、2～3週間の間、浅水で管理すると被害を防止出来ます。

逆に、田面が窪んだ深水部分では、集中的に食害を受けます。

貝を駆除する方法としては、荒代や秋冬のロータリー耕で貝殻を傷つけて殺すのが有効です。また、薬剤による方法として、いもち病防除薬剤のキタジンP粒剤には、殺貝効果があります。10アール当たり3～5キログラムを、食害初期に散布します。なお、苗が活着して生育を始める前に散布すると、生育が抑制される場合があります。



卵塊は、産卵後6月では7日以内、7～8月では5日以内に、水中に落とすと死滅します。

これらの方法を組み合わせて、貝の数を減らすことが基本です。そして被害は、食害期の浅水管理で防ぐのが、良いでしょう。

新しくなった 農業者年金制度

農業者年金制度は、食料・農業・農村基本法の理念に即して改正が行われました。新制度は、農業者の老後生活の安定に加え、担い手を確保するという目的を併せ持つ、政策年金として新しく生まれ変わり、今年1月1日からスタートしました。

1 農業従事者なら誰でも加入

60歳未満の国民年金第1号被保険者であって年間60日以上農業に従事する者であれば誰でも加入できます。
農地を持たない農業者や家族従事者も加入できます。

2 積立方式で安定した財政運営

財政方式を積立方式に切り替えることにより、将来受給する年金は自らが積み立てる方式となりました。

3 保険料の国庫助成

認定農業者等の要件を備えた意欲ある担い手に対し、保険料月額2万円の2割、3割又は5割の政策支援(保険料の国庫助成)があります。

4 税制面での優遇措置

保険料は全額社会保険料控除の対象となり、年金給付についても公的年金等控除の対象となります。

詳しくは、市町村農業委員会まで、お尋ね下さい。

第255号(2002年3月1日発行)より
山武農業改良普及センター